

Horney 理論に基づく就職葛藤時の アイデンティティ形成の道筋

安 藤 聡 一 郎

A Process to Form Identity at the Time of the
Vocational Decision Making according to Horney's Theory

Soichiro ANDO

要 旨

葛藤時に課題に向き合う態度別に個人の成長への道筋を示した心理臨床家である Horney の理論を元に、安藤（2011）で得られたクラスターと Horney 理論における『回避型』、『従属型』、『攻撃型』との間に共通する心性に着目し、個人がアイデンティティを形成し主体的な人間関係を築くプロセスと心理的援助の方法を探索した。〈現実回避タイプ〉と重なる心性を持つ『回避型』の個人が就職を回避する背景には、自分自身を表現して拒絶されることの恐れから「才能がある自分自身」という理想化された自己像にとらわれ、ますます自らの才能や可能性を現実世界で試して傷つくことへの恐れが増す悪循環があることが示唆された。〈焦燥空転タイプ〉や〈不安依存タイプ〉と重なる心性を持つ『従属型』の個人が就職への葛藤に際し他者に頼り決断できなくなる背景には、自己不信の補償として生じた「誰からも愛される自分」という理想化された自己像にとらわれ、嫌われることを恐れて決断できなくなる悪循環が存在することが示唆された。最後に、〈自由享受タイプ〉と重なる心性を持つ『攻撃型』の個人が主に就職後に周囲と対立してでも思い通りに振舞おうとする背景には、他者への不信感の強さから「だれにも頼らず生き残る自分」という理想化された自己像にとらわれ、ますます支配的にふるまうことで、結果としてさらに周囲と対立して不信感を増すという悪循環が存在することが示唆された。これらのことから、『回避型』、『従属型』、『攻撃型』の個人が真の自己を成長させていくためには、それぞれ「現実場面で自分の可能性を試すこと」、「現実場面で自立できる力を養うこと」、「現実場面で他者に受け入れられる努力を重ねること」を具体的な行動に移し、達成感や挫折感など現実の体験を重ねることが必要になるとの仮説が立てられた。

キーワード：Horney, 職業未決定, パーソナリティ類型

第1節 アイデンティティ未形成の大学生の職業未決定の類型とその特徴

青年期のアイデンティティ形成と関連する職業未決定状態の大学生の一群が存在している。笠原（1984）が、アパシーなどアイデンティティの課題が、消極的、病理的な職業未決定につながるとするなど、アイデンティティの未発達と職業未決定とを関連づける研究は多い。中でも、Lucas & Epperson（1990）では、職業未決定の大学生の類型化を行う中で「趣味を仕事や人間関係よりも大事にし、直感的に決断を下し、職業選択に障害を感じていない」群が見出されるなど、将来のライフスタイル展望における職業の持つ重要性の低下が特徴となる職業未決定群の存在の可能性が示された。

日本でも、安藤（2011）が Lucas & Epperson（1990）の研究方法を踏襲して分析を行った結果、大学生の職業未決定の心理的背景が多様化する中、個々のライフスタイルの中での職業の意味が、職業未決定のあり方と関連することが示された。アイデンティティ未形成の学生が職業決定の葛藤に際し、直面して課題に向き合う〈課題直面タイプ〉、向き合えずに回避する〈現実回避型タイプ〉、向き合おうとするものの焦りや無力感から他者に頼る〈焦燥空転タイプ〉や〈不安依存タイプ〉、向き合う必要性を感じていない〈自由享受タイプ〉、直面して課題に向き合う〈課題直面タイプ〉と5つのタイプが見いだされ、アイデンティティ形成の中での職業の意味の違いにより職業未決定の表れ方が異なる可能性が見出された。また、〈現実回避タイプ〉は課題を回避するのみならず、アパシー傾向が高く親密な対人関係を回避する、〈焦燥空転タイプ〉と〈不安依存タイプ〉は周囲の期待に応えて課題に向き合おうとするが不安が高く他者に相談する、〈自由享受タイプ〉は課題に向き合う必要を感じないと同時に周囲の期待に応える必要性も感じないなど、職業への向き合い方と人間関係への向き合い方が密接に関連する様

子も示された。

これらの結果から、個人の就職に向き合えない態度の相違により、職業生活において主体的に人間関係を築く力をも含めたアイデンティティが形成されるまでの過程が規定される可能性が示唆される。そこで、本研究では、個人の葛藤時に人や課題に向き合う姿勢を類型化し、成長への道筋を示した心理臨床家である Horney の理論を元に、本論文で示されたタイプ別に心理的成長を援助するための介入方法を検討したい。

第2節 職業未決定の類型によって浮かび上がる人間関係の向き合い方

Horney（1945/1981, 1950/1998）は、心理的な成長を阻害された個人においては、葛藤に向き合えず「回避」「従属」「攻撃」のいずれかの態度によって防衛していることを明らかにした。彼女の理論によれば、成長を阻害された個人は葛藤時に特定の態度に固執することになる。就業決定の課題に対する取り組みにも、この「回避」「従属」「攻撃」の3つの態度が生じることが予測される。

2008年度の労働政策研究・研修機構による「従業員の意識と人材マネジメントの課題に関する調査」では、30歳未満を対象に会社への入社時に重視したことと現在重視していることを調査しているが、入社時に重視したことでは、「雇用が安定していること」と「自分のやりたい仕事ができること」がそれぞれ43.1%、41.3%と高く、「人間関係がよいこと」は28.3%にすぎなかったのが、現在重視していることでは「人間関係がよいこと」が49.5%と最も高くなっている。このことは、現在の大学生が就職後に必要とするのは職業の技能や適性だけではなく、主体的に協調的な人間関係を築く力であることを示している。Horney の理論が重要となるのは、個人の職業に対する向き合い方を知ることと人間関係への向き合い方を予測することが可能になると共に、その成長への道筋をも明らかにした点である。

本論文では、葛藤時に3つの態度のどれかにこ

だわる個人のパーソナリティの成長への道筋を明らかにした Horney の理論を元に、就職決定の向き合えなさの違いによって心理的成長の道筋がどのように異なるか、また心理的成長のためにはどのような心理的援助が可能かを考えていきたい。

第3節 神経症的力動の発生に関する Horney の考え方

Horney は、個人の成長を植物になぞらえて考えることを好んだ。「どんぐりに対して樫の木になるよう教え込む必要は無いし、事実そんなことは不可能だが、しかし時機さえ来ればどんぐり自身の内部にある潜在力は育ってゆくわけだ。同じように人間の個体も、機会さえ与えられれば自分に固有の人間の潜在力を発達させる傾向をもつ。このとき人は自分の真の自己がもっているかけがえのない生きた力を発展させる。すなわち、自分自身の感情や思考や願望や関心を明確にし、それらを深め、己の才能を開発する力を持ち、意志力を強め、自分に固有の資質を伸ばし、自己表現の能力を養い、自発的な感情で他者に関わる能力をもつようになる。こうしたあらゆる点を通して、やがて人はまとまりある価値観と人生の目的を見出すようになる。簡単に言えば、事実上わき道にそれることなく自己実現に向かって成長するのである。だからこそ私は、本書全体を通じて、真の自己について語るつもりである。真の自己とは、内面にある中心的な力である。それは、誰もがもっていないながらも各人にとって唯一のかけがえのないものであって、成長のための深い源泉をなす力である。(Horney, 1950/1998)」

Horney は、どんぐりが樫の木に成長するためにはそれに適した諸条件が必要なのと同様に、人も成長のためには内面の安心感や自己表現できる精神的自由を与えてくれる暖かい雰囲気が必要とすると述べる。他者の善意により導かれ勇気づけられることで成熟し、他者の願望や意志に接して健全な軌轢を体験して他者と共に成長することで、人は真の自己と一体となって成長できると考えたのである。

しかし一方で Horney は、周りからの悪影響が加わることで、子どもの成長が実現できなくなることがあると指摘する。周囲の人が己自身の神経症的状态にとらわれてその子を適切に愛することができず、一人の人格を持った個人と見なすことさえできなくなってしまうと、その子どもは「私たち」という帰属感を発達させることができず、潜在的に敵対的な世界の中で孤立し無力だと感じる基本的不安が生じるのである。基本的不安の疎外的な圧力のもとで、子どもは真の感情に基づいた自発的な人間関係を取り結ぶことができず、他者と対立する方向へと追いやられる。基本的不安を抑制しながら対人葛藤場面に対処せざるをえなくなった個人は無意識的な戦略として、反抗して戦おうとするか、周囲にいる最も強力な人物にしがみつきますがろうとするか、自分の内面世界から他者を締め出して情緒的に他者との接触から引きこもろうとするかのいずれかの行動様式を取る。この葛藤時の三種類の特有の態度を Horney は、人と対立しがちで自らの偉大さや独自性を断固として信じる『攻撃型』、逆に人に従属しがちで無力さと苦しみを誇張する『従属型』、人から離反し内面の戦場から撤退する『回避型』と3つのパーソナリティ類型に分類した。もちろん、健全な人間関係では、闘争する能力、愛情を求め与える能力、あるいは自分に閉じこもる能力は、互いに補い合い、良い人間関係を築いていくためにいずれも重要なものとなる。しかし、基本的不安によって不安定な状況に置かれた個人は、この3つの態度のバランスが極端に偏り、柔軟性を欠くものとなる。例えば愛情は執着になり、他者を受け入れる力は妥協や譲歩になる。彼らは自らの真の感情に頼ることができず、個々の状況に対する自分の態度が不相当であることに気づかず、反抗的行動や無関心な態度に駆り立てられるのである。このような条件に置かれた子どもは3つの神経症的態度の全ての方向に向けて駆り立てられるため、他者に対する態度は根本から矛盾し、葛藤を作り出すと Horney は述べる。この葛藤を解決するために個人は3つの態度の中で、常時一つを働かせ

ることで葛藤を解決しようと試みるが、真の感情が弱まりアイデンティティの感覚を失うことで、真の自己から疎外されてしまうのである。

Horney は、アイデンティティの感覚を失って真の自己から疎外された個人は、自分がどこに位置し、誰であるかがわからなくなると指摘する。一面的な解決策しか発達しないため自身の持つ多様な領域を建設的に用いることのできなくなり、内部の力を蝕まれ、自信を失ってしまう。その結果、個人は自信を得るためのものを死にもの狂いで追い求めるようになる。しかしその欲求が満たせなかった時、一挙に満たすことができそうに見える方法、すなわち想像力を用いて理想化された自己像を作り出すことでアイデンティティや己との一体感を取り戻そうとするのである。一体感を得るためには、理想化された自己像の内容に個性がなければならない。そのために特殊な個人的経験、幼児期の空想、私的な欲求、生来の資質などを土台としながら、自分独自の理想化された像を作り上げていくのである。最初の段階では、葛藤に対する自分独自の解決策が美化されると Horney は述べる。例えば、服従は善を意味し、愛は高貴さ、攻撃性は力強さやリーダーシップに、よそよそしさは智恵や独立心と見なされるのである。一方で欠点や短所と思われる事柄や矛盾した諸傾向は隠べいされ修正される。例えば、自分の服従的傾向は高潔さに置きかえられ、対立的傾向は英雄的なリーダーシップに置きかえられ、物事への無関心は哲学者の如き智恵に置きかえられる。矛盾した諸傾向が美化されて親和的に両立することで葛藤は消滅し、個人は理想化された自己と自身を同一視するようになり、自らの価値と意義に対する誤った信頼を形成するだけではなく、潜在力を実現して成長しようとする欲動までも奪われてしまうのである。Horney は、この自己実現に向けて発動されるべきエネルギーが理想化された自己を現実化する目標へと振り向けられ転換される現象を「栄光の追求」と呼んだ。しかし、栄光の追求により葛藤を解決してアイデンティティを取り戻そうとする試みは解決策は偽りに過ぎない

ので、次々と新たな葛藤が生まれては新たな解決策を必要とする結果となるのである。

以上、神経症的な力動の発生に関する Horney の理論を見ると、同じくアイデンティティについて理論化した Erikson と同様に、個人の発達を支援する視点を重視していることがわかる。特に真の自己の記述となる「自分自身の感情や思考や願望や関心を明確にし、それらを深め、己の才能を開発する力を持ち…」は Erikson (1959/1973) のアイデンティティの定義と重なるものがある。

Horney (1950/1998) 自身、「自己疎外の状態にある個人に必要なのは、自分自身を支えてくれる何か、つまりアイデンティティの感情である……(中略)……このアイデンティティの感情をもつことにより、彼は自分のなかで自分自身を意義ある存在にすることができる。そして心理的資質の面ではさまざまな弱さをもっているが、自分のなかに強さと生きる意義を感じとることができる」と述べるように、自己疎外された真の自己を成長させるためにはアイデンティティの形成が必要となると考えている。

安藤 (2011) では、職業アイデンティティ未形成の学生が、就職課題にどのように向き合っていないかをクラスター別に考察した。Horney の理論から見れば、職業アイデンティティが相対的に高かった<課題直面タイプ>の学生以外は、職業決定を回避する<現実回避タイプ>は『回避型』の解決法を、職業決定に際して他者に依存する<焦燥空転タイプ>と<不安依存タイプ>は『従属型』の解決法を、周囲と攻撃してでも職業決定を無視する<自由享受タイプ>は『攻撃型』の解決法をそれぞれ主に用いていると言えるだろう (Table 1 参照)。

「回避」、「従属」、「攻撃」の解決法はどれも必要なものであるが、理想化された自己にとらわれて一つの解決法にこだわることで真の自己、すなわち自分自身の感情や思考や願望や関心がわからなくなってしまうのである。これは進路選択をする上で本質的な障害になっていると思われる。

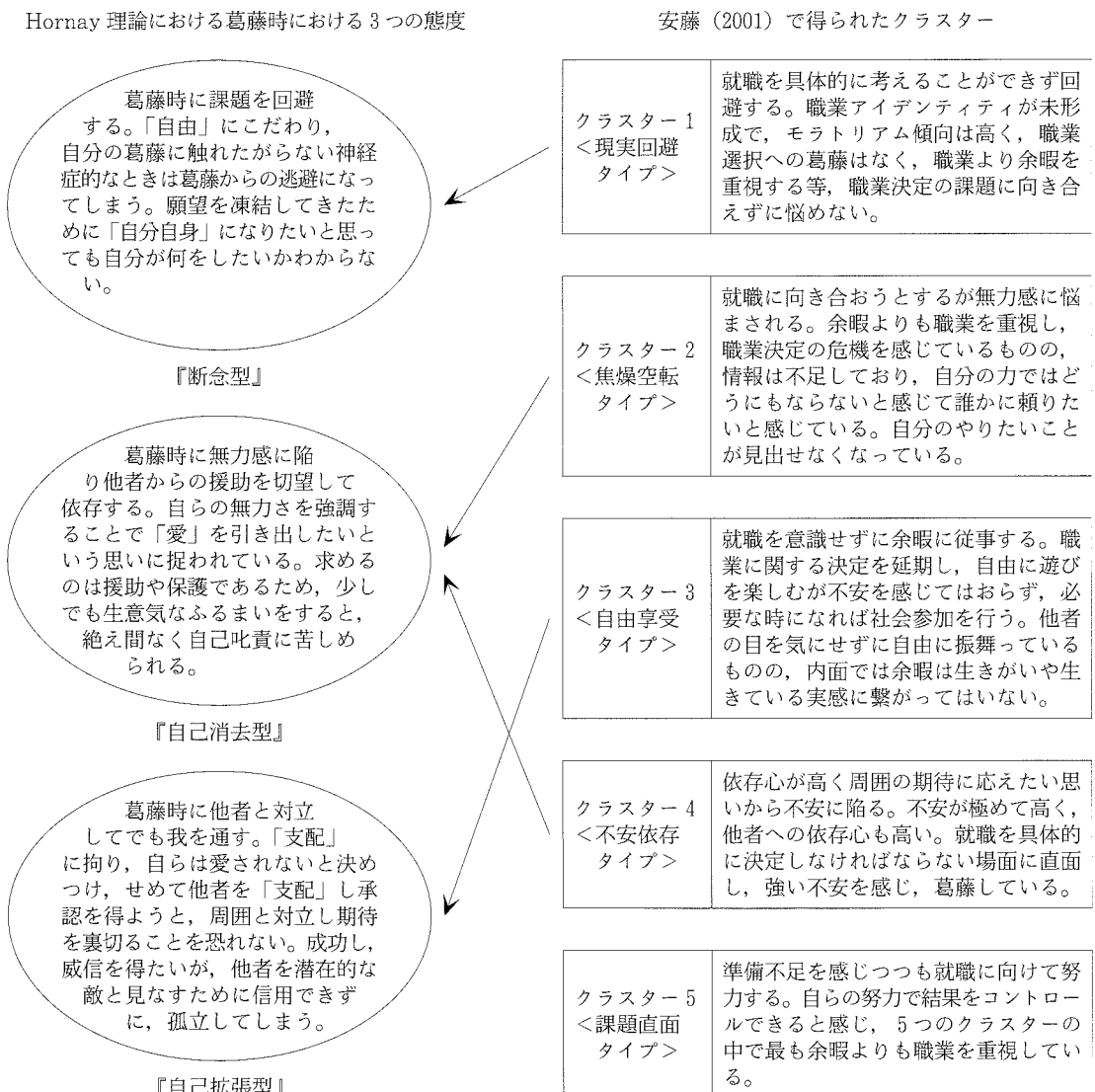
また前述したように、Horney の理論によれば、

個人が神経症的になればなるほど葛藤時に一つの解決法に固執することになるため、職業アイデンティティが未形成で職業未決定状態に陥っている個人は、職業に向き合えない態度と同じ態度を人間関係でもとると思われる。例えば、＜現実回避タイプ＞のように職業に対して回避的な態度を取る個人は、人間関係で葛藤が生じた時も回避的な態度を取ることが予測される。

では、神経症的力動の中で理想化された自己像

や葛藤時に特定の解決法へのこだわりにとらわれた個人を、このとらわれから解放して成長への可能性を取り戻すためにはどのような援助ができるのだろうか？ Horney は、個人の発達をとる間違った方向を「治療」することはできずとも、発達がより建設的な方向をとるような援助はできると、発達支援モデルを考えた。以下にその発達支援理論を見ていく。

Table 1 安藤（2011）で得られたクラスターと Honey 理論の『断念型』『自己消去型』『自己拡張型』の心理特性



第4節 Horney の発達援助理論に基づく個人の成長の過程

Horney は、理想化された自己像にとらわれた神経症の状態は単に自らの価値と意義に対する過大な評価を形成するだけではなく、潜在力を実現して成長しようとする欲動までも奪ってしまうと考えた。彼女は、この自己実現に向けて発動されるべきエネルギーが理想化された自己を現実化する目標へと振り向けられ転換される現象を「栄光の追求」と呼び、真の自己の成長を促す健全な努力との差異の明確化を試みている。

理想化された自己像をもたらす栄光の追求と健全な努力との相違を理解するためには、Horney の自己肥大化（ナルシズム）についての考え方を説明することが重要になると思われる。と言うのは Horney によれば、理想化された自己像は自らの資質を過剰に自己肥大化した結果生まれるからである。

原則的に精神分析は、ナルシズムを中立的な価値を持つ概念として扱うが、同時に健康なナルシズムと病理的なナルシズムの区別も行っている (Freud, 1914/1969; Kernberg, 1975)。精神分析の流れから自己愛を考察し独自の自己心理学を形成した Kohut (1971/1994) は、ナルシズムそのものが人格障害を引き起こすわけではなく、「誇大自己」の非現実的な要求のせいで引き起こされる、ナルシズムの失敗が苦痛を生むことを指摘する。その半面、「自己愛的リビドーが成熟することによって、自身の存在の有限性を知覚し、この痛みを伴う発見を踏まえて生きていく (Kohut, 1957)」と述べるように、自身の有限性の自覚と非現実的な要求をもたらす誇大自己

との違いが、健康なナルシズムと病理的なナルシズムとの差異なのである。

この Kohut より以前にすでにナルシズムの両価性に着目していた Horney も正常な自尊心と自己膨張（ナルシズム）との違いは質的なものと指摘していた。真の自尊心は個人が実際に持っている性質に基づいているが、自己肥大化は正当な基盤がない性質を自他に示そうというものであり、自己肥大化の結果として理想化された自己が生じるのである。すなわち、栄光の追求とは理想化された自己像を実現しようとするナルシズムの肥大化現象であり、真の自己を成長させようとする健全な努力から生じた自尊心とは、成長の方向を全く異にするものなのである。すなわち、Horney 理論における「理想化された自己像」は、自己愛理論の文脈では、「過剰に理想化された自己」に相当する概念なのである。

栄光の追求と健全な努力との差異を Horney の記述を元にまとめると以下の通りになる。まず、健康な努力が自発的であるのに対し、栄光の追求は理想化された自己を現実化しようとする強迫性に特徴がある。また、栄光の追求は理想化された自己像という栄光に満ちた結果に一步で達するべきと感じているため、自分の限界を受け入れられず、少しずつ進歩を築きあげる過程には興味が持たず、努力や活動内容には注意が払われない点で健全な努力とは大きく異なるのである。さらに、健全な努力から得られる自尊心は一人の人が実際に持っている性質に基づいているが、栄光の追求の産物である理想化された自己像は自らの性質を拡大解釈した虚像を他者と自分に示そうというものでしかないという点で大きく異なる (Table 2 参照)。

Table 2 理想化された自己像へ向かう「栄光の追求」と真の自己の成長に向かう健全な努力との相違

「栄光の追求」の特徴		健全な努力の特徴	
①	根拠のない、もしくは自己肥大化による自信	①	努力や実績に基づいた自信
②	理想化された自己の達成への強迫的欲求	②	発達や進歩を求める自発的欲求
③	栄光に満ちた結果のみを重視	③	結果に向けて努力して近づく過程に価値

栄光の追求による自己の理想化は強迫的な性質を持ち、理想化された自己像を達成させようと個人を駆り立てる。しかし、想像力を用いて作り出された理想化された自己像は無限の高みと完璧さを備えているため、個人がいくら努力しても近づけることも報われることもなく、常に己を責め苛む地獄のような内面の状態に陥ることになり、遂には真の自己を喪失する。

Horneyはこの神経症的な力動を、理想化された自己像からの「内的命令」と命名し、個人は理想化された自己像からの内的命令により栄光の追求に駆り立てられ、その結果真の自己の成長が放棄されてしまうと考えたのである。

この内的命令による栄光の追求を突き崩し、理想化された自己像を放棄して真の自己を発達させるには、神経症的特徴の顕在化を情動的体験を伴って認識することが必要とHorneyは指摘する。例えば従属型の個人なら、自分の内部に他者への大きな軽蔑が存在することを突然自覚するかもしれない。理想化された自己像を突き崩して神経症的解決策を弱体化させる動きは、治療の目的である新たな方向づけのために不可欠である。Horneyはこれを「幻滅の過程」と名付けた。幻滅の過程は、理想化された自己像を生み出している自らが固執する解決法を情動的な体験として実感することで生じる。自分が誇りにしていた性質が、実は理想化された自己像からの命令によるもので、実際には自分で思い込んでいるほど身に備えていないことを理解することから始まり、最後には自らの価値体系や目標の妥当性に疑問を抱くようになるのである。こうした幻滅の過程は、現実や価値体系を吟味して理想化された自己像の矛盾を明るみに出す過程として意味づけることができ、一つの解決法に固執する動きを弱めることにつながると言える。

しかし、Horneyは幻滅の過程だけでは治療には不十分で、幻滅の過程と同時に真の自己を成長させる建設的な動きが起こらなければ、何らかの効果があるにしても徹底的かつ永続的な解放という効果を持ちえないと指摘する。ギーゲリッヒ

(2003)は「私は心理学的にこの世でたった一人ぼっちなのだ。私はすべて自分でやっていて、原子のような主観性であって、小さな土くれにしかすぎない」との洞察を神経症的な魂は受け入れることができないと述べる。幻滅の過程は、理想化された自己像の不合理的を明るみに出す洞察を個人にもたらすことで神経症から一時的に離脱させるが、それだけでは洞察を受け入れられず神経症へと戻ってしまうと考えられるのである。

Horneyは、こうした過程を支持して個人の自覚を手助けするために、セラピストには無意識の複雑に構造に関する幅広い知識及び発見し、理解し、関係づけるという個人的な才能の他に、経験によって得られる真の自己の様々な現れ方についての知識をも必要とし、何よりも重要なことはセラピスト自身が建設的な人間であり、自己の究極の目標はクライアントの自己発見を助けることであるという明確なビジョンを持っていることであると述べる。

このHorneyの言葉は難解ではあるが、幻滅の過程が生じた時に個人の真の自己の表れ方に即してセラピストが適切に介入することが、個人が理想化された自己像を離脱して真の自己を成長させるために必要なことを示しているように思われる。

本論文では、このように理想化された自己像にとらわれて進路や人間関係につまづく個人に対して、どのようなセラピストの介入が適切であるのかについて考察を進めたいが、そのために、まず次節では、Horneyの記述を元に、安藤(2011)で類型化された就業課題に向き合えない<現実回避タイプ>、<焦燥空転タイプ>、<不安依存タイプ>、<自由享受タイプ>のそれぞれの個人が就職に向き合えない心理的背景と、人間関係のあり方を考察したい。

第5節 『回避型』『従属型』『攻撃型』の個人が就職に向き合えない心理的背景について

本節では、安藤（2011）で類型化された〈現実回避タイプ〉、〈焦燥空転タイプ〉、〈不安依存タイプ〉、〈自由享受タイプ〉を Horney 理論における『回避型』、『従属型』、『攻撃型』に関連させて、アイデンティティ未形成の個人が就職未決定に陥る心理的背景を探る。

1. 職業未決定群の〈現実回避タイプ〉が就職に向き合えない心理的背景

就職への葛藤から目を背けてしまう就職未決定群における〈現実回避タイプ〉は、葛藤時に課題を回避することが特徴となる Horney 理論で言うところの『回避型』の心性と共通点があると考えられる。現実回避型の個人はアパシー傾向の高さが特徴であったが、スチューデント・アパシーには、困難が予想され脅かされる場面の回避、自分の失敗を認められない防衛的完全癖などが指摘されている（笠原，1978；土川，1981）。端的に言えば、自分を守るために学業や就業、人間関係など葛藤を引き起こす場面から離反して引きこもる姿が示されている。しかし、Horney は離反欲求それ自体は真の自己から疎外された個人に共通する現象であり、『回避型』の本質は自分の葛藤に触れないでいることで「自由」にこだわることだと述べる。健全な時は何かを成し遂げるための自由であるが、神経症的なときは葛藤からの逃避になってしまう。自由でいたいから圧力には我慢がならないが、願望を凍結してきたために「自分自身」になりたいと思っても自分が何をしたいかわからない。Horney の『回避型』の記述から、就職への葛藤から目を背けてしまう背景には自らの願望へのこだわりがあることが伺える。安藤（2007）は、相対的に偏差値の高い大学の学生がアパシー傾向に陥りやすいことを検証した。このような大学の学生は大学入試での成功を体験しているために才能や可能性を信じたい気持は強いが、

傷つきやすい部分でもあるので、就職に際して、再度現実世界で他者の評価にさらされることは恐怖となる。周囲の期待を受けて自分自身に課す理想は高いが、その理想を実現する自信がないのである。ここで〈現実回避タイプ〉の就職未決定群に求められる適切な介入とは、就業に向けて自尊心を高めて現実世界で可能性を試す勇気を持つための援助であろう。

2. 〈焦燥空転タイプ〉〈不安依存タイプ〉が就職に向き合えない心理的背景

就職への葛藤に際して自ら決定することができず他者に依存してしまう職業未決定群における〈焦燥空転タイプ〉と〈不安依存タイプ〉の臨床像は、葛藤時に無力感に陥り他者からの援助を切望する Horney 理論における『従属型』の心性と重なるところがある。〈焦燥空転タイプ〉と〈不安依存タイプ〉は共に就職を求める社会からの期待に応えようとしている点の特徴であった。現代社会は二人関係的な意識を中心におく文化へと変容しアイデンティティのおぼつかなさ、依存と自立の両価性などが特徴となる境界例に似た青年期心性を内包していると滝川（2004）は指摘する。Horney は、『従属型』の個人が葛藤に際して他者に依存するのは自らの無力さを強調することで「愛」を引き出したいという思いにとらわれているからだと述べる。健全な時は自立した上で他者の力となるが、神経症的な時は他者への依存になってしまう。Horney は、『従属型』の個人は無力さや愛らしさを強調して他者からの情愛を勝ち取ろうとする傾向があると述べる。求めるのは援助や保護であるため、少しでも生意気なふるまいをすると、絶え間ない自己叱責に苦しめられるのである。Horney の『従属型』の記述からは、就職への葛藤に際し他者に頼り決断できなくなる背景には、自己不信の強さがあることが伺える。例えば努力や実績を重ねても、成功よりも失敗にとらわれがちのために自信が持たず、決断することへの不安が強くなる。ゆえに〈焦燥空転タイプ〉と〈不安依存タイプ〉の個人にとって、自己不信を

いかに乗り越えて決断するかが就職に向けての鍵となると思われる。

3. <自由享受タイプ>が就職に向き合えない心理的背景

最後に周囲からの職業決定への期待を無視してでも余暇活動に従事する<自由享受タイプ>は、葛藤時に他者と対立してでも我を押し通す Horney 理論における『攻撃型』の心性につながると思われる。<自由享受タイプ>の心理的背景は、やや広い社会関係やわずか先の未来にさえ関心を失う「刹那型思考」に通じる。刹那型思考では長期的展望に立った就業よりも現在の興味を優先する。他者は競争相手と見なされ、享楽を追求することが後の世代の生存を脅かすことになるとは考えなくなる。Horney は、『攻撃型』個人が葛藤時に周囲と攻撃し期待を裏切ることが恐れないのは「支配」にこだわるためと述べる。自らは愛されないと決めつけ他者は潜在的な敵と見なすために他者に嫌われることを恐れない。成功し、威信を獲得することで他者から承認を得たいが、神経症的な時は他者を信用することができず、孤立してしまうのである。Horney の『攻撃型』の記述から、就職時に周囲と対立してでも思い通りに振舞おうとする背景には、他者への不信感の強さが伺える。健全な時は家族など信頼できる仲間を守ることにもつながるが、神経症的な時には他者との摩擦を生み出す。就職を成功するための手段と見なせば就職自体はできるだろうし、競争に勝ち抜くことにも力は注げるだろう。しかし、他者を信頼できないままではいずれ孤立と挫折を招いてしまう。ゆえに<自由享受タイプ>の個人にとって、人間関係で裏切られ続けてきたと感じる思いを乗り越え、他者との信頼関係を築いていくことこそ就業に向けて大切であると思われる。

以上、Horney 理論に基づいて個人が就職に向き合えない心理的背景を探ったところ、就職に向けての姿勢と人間関係のあり方が密接に関連することが示された。職業とは社会の中での自らの役割を決めるものであるため、職業決定は一面で

は他者とどのように関わり周囲の思いをどのように自身に受け入れるかを決めることにつながる。次節では、個人が主体的な人間関係を持てるようなアイデンティティを築くための心理的援助の方法を検討したい。

第6節 まとめ—就職課題に向き合えないアイデンティティ未形成の個人を援助するための仮説の生成—

前節では、職業アイデンティティ未形成の大学生の職業未決定のクラスター分析から明らかになった<現実回避タイプ>、<焦燥空転タイプ>、<不安依存タイプ>、<自由享受タイプ>が有する心理的背景を Horney 理論における『回避型』、『従属型』、『攻撃型』と関連づけて考察を行い、アイデンティティ未形成の個人が就職や人間関係に向きあえない心理的背景を探った。本節では本論文のまとめとして、アイデンティティ未形成の個人が就職や人間関係に向かう姿勢を成長させる道筋を考えたい。

Horney 理論に基づけば、青年のアイデンティティの形成が阻害されるのは、葛藤時の不安に対処するために『回避型』、『従属型』、『攻撃型』のいずれかの態度に固執して真の自己との接点を失うためである。アイデンティティ形成が阻害された個人は、自己の一体感を保つために理想化された自己像という想像上のアイデンティティを作り出す。これは偽りであるために次々と葛藤が生じるとされている。したがって、アイデンティティ形成に向けては理想化された自己像を放棄して真の自己を成長させることが必要であり、そのために葛藤時に特定の態度に固執することの不合理や理想化された自己像の矛盾に気づく幻滅の過程が生じることが不可欠であると Horney は述べているのである。

しかし一方で、Horney は理想化された自己像からの永続的な離脱のためには幻滅の過程だけでは不十分であると指摘する。幻滅の過程により、障害となる力は弱まり、真の自己が持っている建

設的な力が成長する機会は生じるが、それを生かせなければ意味がないのである。

以上の点を踏まえ、本節では、幻滅の過程が生じた時に真の自己の成長を促す方向への介入の方法を検討したい。

Horney は、理想化された自己像が生み出すシステムの矛盾を知識としてではなく経験を通して知らなければならぬと述べるように、真の自己の成長には現実の経験を重ねることが大切だと考えていた。このことから、介入の方向性としては、真の自己の成長につながる方向への個人の現実世界での行動を後押しし、妄想ではなく現実的な基盤を持つ自尊心を育てることを試みるのが、一つの方法として考えられる。

では、理想化された自己像は具体的にはどのような形で表れ、就職や人間関係と関係してくるのであろうか。前節で行った Horney 理論に基づいた考察により、『回避型』の個人が就職を回避するのは、自らの可能性を表現して拒絶されることの恐れから、「才能がある自分自身」という理想化された自己像を守るために、自らの願望を抑えてまでも周囲からの期待に応えようとするからであることが見えてくる。しかし、この方略は自らの願望を委縮させてますます傷つきへの恐れが増す悪循環があると予想される。逆に、Horney (1950/1998) の「(『回避型』の個人は) 束縛からの自由によって、彼は内面の独立という可能性を手に入れる」、「真の自己を見つけるためには、神経症的な美化された自己を失わなければならない」との言葉からは、傷つくことへの恐れを乗り越えて自らの可能性を現実で表現することが真の自己につながる可能性が導かれるのである。

また、『従属型』の個人が就職への葛藤に際し他者に頼り決断できなくなる背景には、自己不信の強さから「誰からも愛される自分」という理想化された自己像にとらわれ、ますます嫌われることを恐れて決断できなくなる悪循環が存在すると予想される。Horney (1950/1998) は「(『従属型』の) 子どもの心のなかで、反抗したいという願望が愛情を受けたいという欲求と闘っていた数

年間に過ぎると、彼は敵意を抑制し、闘争心を放棄してしまい、愛情に対する欲求が勝利をとげてしまったのである」、「清らかで愛される性質をもつ彼の自己像そのものが、自尊心を意識的に感じることを禁じるのだ…彼にとって、誇り高く榮譽ある自己と自分自身を同一化させることは不可能だろう。彼は、抑えつけられ犠牲となった自己としてしか自分自身を経験することができないのである」と指摘する。この言葉からは、『従属型』の個人にとって他者から拒絶される恐れを乗り越えて自立した個人となることが真の自己につながる可能性が導かれるのである。

最後に、『攻撃型』の個人が(主に)就職後に周囲と攻撃してでも思い通りに振舞おうとする背景には、他者への不信感の強さから「だれにも頼らず生き残る自分」という理想化された自己像にとらわれ、ますます支配的にふるまうことで周囲と攻撃して不信感を増すという悪循環の存在があることが予想される。Horney (1950/1998) は『攻撃型』の報復心は、幼少期に人間関係でよくない経験が重なり、それを修復できる要因がわずかしかないことが出発点になると指摘する。「直接的な暴力、屈辱、嘲笑、無視、はなはだしい偽善などを受けると、とくに過敏な子どもは大きな打撃をこうむる…その子は共感や関心や愛情を得ようとして哀れな試みを行うが成功せず、最後には、柔和な欲求をすべて押し殺してしまう。彼は徐々に、本物の愛情などは得られはしないと思うだけでなく、そんなものは実在しないとまで断定するようになる。最終的に愛情をもらえなくなり、むしろそれに敵意をもつにいたる。だがそれは重大な結末に向かう第一歩である。というのも、愛情や人間的な温かさや親密さを求める気持ちは、好感がもてる人間的資質を発達させるための力強い誘因だからである。愛されているという感情や、さらに、自分には魅力があるという感情は、おそらく人生のなかでもっとも大きな価値だろう」。この Horney の記述からは、『攻撃型』の個人が避けている愛情を獲得するための努力こそが、真の自己の成長へとつながることが示され

ているのである。

したがって、『回避型』、『従属型』、『攻撃型』の個人が真の自己を成長させていくためには、それぞれ「現実場面で自分の可能性を試すこと」、「現実場面で自立できる力を養うこと」、「現実場面で他者に受け入れられる努力を重ねること」を具体的な行動に移し、達成感や挫折感など現実の体験を重ねることが必要になると思われる (Table 3 参照)。

幻滅の過程が生じた時にこれらの動きを後押しする方向でセラピストが介入することで、個人の理想化された自己像からの離脱を促し、真の自己の成長を促すことも可能になると考えられるので

ある。

これらの『回避型』、『従属型』、『攻撃型』に関する考察から就職に向けてのアイデンティティ形成過程の問題を考えると、『回避型』と『従属型』の個人は、周囲の期待に応えたり従属的にふるまうことで個性を見失い就職活動に対応できない問題が、『攻撃型』の個人は就職後に協調的な人間関係を築けない問題が生じる可能性が危惧される。特に、学歴社会意識など一元的な将来イメージにとらわれやすく個性を育てることが難しい日本社会においては、『回避型』と『従属型』の個人のアイデンティティ未形成の問題は深刻になりやすいと考えられるのである。

Table 3 Horney 理論における葛藤時に人が取りうる3つの態度

『断念型』

①	葛藤時における態度	直面すべき課題や人を回避する
②	その他の主要な特徴	自らの願望を縮小し、他者の期待に無理に添う
③	態度の背景にあるこだわり	自由であると感じていたい
④	態度に固執する背景	自らに才能がないとの怖れから、現実世界に踏み出せない
⑤	真の自己の成長への鍵	現実場面で自己の可能性を試すこと

『自己消去型』

①	葛藤時における態度	無力感を感じ、他者に頼ろうとする
②	その他の主要な特徴	他者に対して生意気なふるまいをすると自分を責める
③	態度の背景にあるこだわり	他者に愛され守られたい
④	態度に固執する背景	他者から保護されたいと願い、自ら決断ができない
⑤	真の自己の成長への鍵	現実場面で自立できる力を養うこと

『自己拡張型』

①	葛藤時における態度	敗北を恐れ、他者を打ち負かそうとする
②	その他の主要な特徴	他者に融和的なふるまいをすると自分を責める
③	態度の背景にあるこだわり	他者を支配して生き残りたい
④	態度に固執する背景	他者に裏切られ続けたと感じ、信頼することができない
⑤	真の自己の成長への鍵	現実場面で他者に受け入れられる努力を重ねること

引用文献

- 安藤聡一郎 (2007): 学歴社会意識とスチューデント・アパシーとの関係についての考察 学習院大学人文科学論集, 16, 137-166.
- 安藤聡一郎 (2011): 日本の大学生の職業未決定類型化に関する一考察—アパシー心性及び余暇重視との関連から—, 青年心理学研究, 23, 175-184.
- Erikson, E. H. (1959): *Identity and the Life Cycle*, New York: International University Press Inc.
- 小此木啓吾 (訳編) (1973): 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- Freud, S. (1914): Zur Einführung des Narzißmus, GW, Bd. X, S. 138-170. 懸田克躬・吉村博次 (訳) (1969): ナルシズム入門 フロイト著作集5 人文書院
- ヴォルフガング・ギーゲリッヒ (2003): 治療において何が癒すのか? 河合俊雄 (訳・解説) 心の科学, 109, 114-125.
- Horney, K. (1945): *Our Inner Conflicts*, New York: Norton. 我妻洋・佐々木譲 (訳) (1981): 心の葛藤 精神書房
- Horney, K. (1950): *Neurosis and Human Growth*, New York: Norton. 榎本譲・丹治竜郎 (訳) (1998): 神経症と人間の成長 精神書房
- 笠原嘉 (1978): 退却神経症 withdrawal neurosis という新カテゴリーの提唱 中井久夫・山中康裕 (編) 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版社 pp.287-319.
- 笠原嘉 (1984): アパシー・シンドローム—高学歴社会の青年心理— 岩波書店
- Kernberg, O. F. (1975): *Borderline Conditions and Pathological Narcissism*, New York, Aronson.
- Kohut, H. (1957): Introspection, empathy and psychoanalysis, (1st pres. at the 25th anniversary meeting of the Chicago Institute for Psychoanalysis, Nov. 1957), in P. H. Ornstein (ed.) *The Search for the Self*, vol. 1, pp.205-232, New York: International Universities Press, 1978.
- Kohut, H. (1971): *The Analysis of the Self*, New York: International Universities Press. 水野信義・笠原嘉監 (訳) (1994): 自己の分析 みすず書房
- Lucas, M. S. & Epperson, D. L. (1990): Types of Vocational Undecidedness: A Replication and Refinement. *Journal of Counseling Psychology*, 37, 382-388.
- 労働政策研究・研修機構 (編) (2008): 「従業員の意識と人材マネジメントの課題に関する調査」報告書
- 滝川一廣 (2004): 新しい思春期像と精神療法 金剛出版
- 土川隆史 (1981): スチューデント・アパシー 笠原嘉・山田和夫 (編) キャンパスの症候群 弘文堂 pp 143-166.